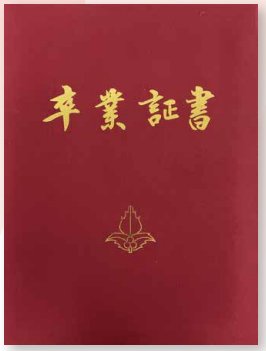
OTANing
大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!
2025.3
vol.241
卒業特別号



卒業おめでとう

「受け入れる」と「支え合う」
～それができずに立ち尽くす私たち～

学校長　乾 文雄

1月16日、兵庫県の姫路を訪れました。年の初めに勤まる法要「修正会」でお話をするご縁をいただいたのです。姫路に足を降ろしたのは3回目のように記憶します。

1回目は小学校低学年の時。父に連れられ電車を乗り継ぎ、それは2時間を超える旅でした。滋賀から京都、大阪、兵庫と、県境越えを伝える標識を見つけては、この行き先のわからない旅に不安を感じるどころか、わくわくしながら車窓に広がる景色を楽しんでいたのを覚えています。自分の「旅好き」(というか移動好き)はこの頃から始まっていたようです。

父の姫路での用事が何であったのかは記憶にないのですが、駅ビル高層階の、正面に姫路城が見えるレストランで食事をしたのは鮮明に覚えています。父は係りの方に「ライスカレー2つ」と注文し「肉入ってるか～?」と質問しました。それに対して「少しは入っていると思いますよ～」との返事。今なら考えられない昭和のやり取り。「カレーライス」とは言わない父。窓の向こうにどっしりと構える白いお城。非日常満載の小旅行でした。

2回目は、それから40年ほど後の春休み、子ども3人を連れた家族旅行でした。行き先は末っ子の「うさぎさんにえさをあげたい」、長男の「絶叫系の乗り物に乗りたい」、次男の「スケートをしてみたい」という願いをすべて満たしてくれる夢のような遊園地でした。次男坊の欲望を叶えるまでは。

子どもたちは初めてのスケートだったので、けがをされては困ると思い、靴選びから準備体操、初歩的な動き方の説明をして、「まあ、見ときなさい」とお手本を見せるべく滑り出しました。しかし、スピードに乗ったところで派手に横転。大き目の靴を緩い目に履いていた私の右足首は、あらぬ方向に曲がり、その上に尻もちをついてしまいました。苦痛に顔をゆがめる私の横を、「そうやってこけるのか～」と長男が滑り去りました。「大丈夫や」とやせ我慢の一言をリンクに残し、場内の看護室までどうにかたどり着きました。靴を脱いで投げ出した足を見ると、怖いほどに腫れあがり、いままでストーブに当たりながら編み物をされていた看護師さんに「あれま～」と、けがの心配の前にあきれられる始末でした。「いい格好をしようとして、いきがってはいけない」という教訓を得ました。治りませんが。

そして、今回が3回目です。小学生の時にライスカレーを食べたビルは建て替わり、駅前は街ごとリニューアルされていました。姫路城も修復が完成し、白さがひと際目立つ立派な佇まいでした。2回目の教訓を生かし、足元を確認しながら歩きました。

「あれから30年です」。

別院でのお話の後、出席された皆さんと話し合う時間がありました。その場である方が発せられた言葉です。翌17日は阪神淡路大震災のあった日です。その日から30年ということです。そこには家族や友人を亡くし、住むところも家財道具の全ても無くした方々もおられ、「茫然自失」の中で過ごした30年前の思い出を、淡々とお話しくださいました。私の耳の底に残るのは、

「一番難しくて一番大事なこと。それは現実を受け入れるということ。それができないと次の一歩が踏み出せない。文句と愚痴と嘆きが生活を支配してしまう。でも、どうにか受けとめが整って、次の一歩を踏み出せたら、気づく。一人では何もできないことに。そして周りを見て、さらに気づく。みんな支え合って生きていることに。私も支えられていたことに。だから、支え合って生きて行こうと思えた。そうしたら30年が経った。」というお話でした。

これは何も震災に限った話ではありません。私たちの人生は何が起こっても不思議ではないのです。「生は偶然、死は必然」の「いのち」なのです。思い通りにならないこと、予想外の展開ともいうべき事態はみんなに起こり得ます。だからこそ、忘れてはいけない大切なことを教えていただいたように思うのです。

大谷を卒業していく皆さん、幸多きことを願います。しかし、そうでなくても生きていけるということを忘れないでください。「受け入れること」と「支え合うこと」を忘れ、立ちすくんでしまった時に、「大谷生」であったことの意味が、あらためて開かれるはずです。

卒業おめでとう。

大谷中学・高等学校
OTANI JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL
京都市東山区今熊野池田町12　TEL:(075)541-1312　https://www.otani.ed.jp
編集兼発行責任 宗教・国際センター長 林 陽樹